混迷の玉座　～二冊の手記と綴られたる裏歴史～

柳　リョウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
混迷の玉座　～二冊の手記と綴られたる裏歴史～

【Ｎコード】
Ｎ３４３７Ｔ

【作者名】
柳　リョウ

【あらすじ】
世界を救う勇者と、世界を滅ぼす魔王。綴られたるは、歴史を覆す本当の真実。
※混迷の玉座の修正版

登場人物紹介

◇登場人物紹介◇

本編の進行に合わせて随時更新

勇者様の言い訳

・遠藤麗奈

異世界にやってきた渡来者。高校一年生で１６歳。生真面目で、なんでも背負い込む性質がある。

もともと魔術と巫女（精霊と語る者）の素質があり、その方面で特化した異世界で能力が開花、それを役立てたいと考える。

通称勇者と呼ばれる。

・ライラ・レサイティム

反乱軍の旗頭で王族の傍系。１８歳。か弱そうな外見に反して強い意志を持つ、誰もが認めるリーダー。

幼い頃に王位継承権を失っている。

・リネット

麗奈の護衛を務める武人。２３歳。面倒見が良く、お母さんのよ

うだと言われる。
元農民で、姓を持たない。ユリシーズ、ダグラスとは幼馴染。

・ユリシード・カニンガム

麗奈の護衛を務める武人。２３歳。真面目だがどこか抜けている。
小領主の息子。リネット、ダグラスとは幼馴染。

・ダグラス

麗奈の護衛を務める武人。２３歳。明るく朗らかで少々体力馬鹿。
元農民で、姓を持たない。

魔王様の言い分

・ジェラルド・エイヴァリー

レスティア王国の王。２６歳。不吉の徴であると言われる紅い瞳の持ち主。
実際レスティア王国に不吉をもたらし、魔王と呼ばれる。

遠藤麗奈の手記（前書き）

※これは混迷の玉座の修正版的なものです。無駄に淡々としている・何か物足りない気がする・展開が早い等のことがあるんじゃないかと思いますが、とりあえず大雑把に全部書いてみる、という感じなのでそれをご理解ください。

遠藤麗奈の手記

この世界にやってきて、すでに一年が経つ。

思い返せば、本当に短い一年だったと思う。せわしなく、今までの生活とは違う一日一日がとても濃い日々だった。

この世界で、私はいろいろなことを知った。苦しみ、そしてその先の喜び。

魔王と呼ばれた王と、勇者と呼ばれる私が戦う。なんてありきたりな話かと最初は思った。

でも、実際はありきたりなんて言葉で片付けられるほど内容の薄い話じゃなくて、今日、この日を迎えられたことさえ奇跡と呼べるような苦しい日々だった。平和な高校生生活が、少し懐かしい。

この国も今、動乱を乗り越え平和を迎えようとしている。けれど、私にはひとつ心残りがあるのだ。

この戦いに、間違いはなかったのかと。

……それを疑うのは、今まで私たちと共に戦い、命を落としてきた仲間への侮辱かもしれない。

いや、戦いはどれも正しいと言えないことは分かっているのだけれど、それとは別に、何か間違いが歩きがするのだ。

けれど、考えずにいられないのだ。今もまだ、ほんの一時しか姿を目にしなかった彼の王の姿が目に残っている。

何かを見落としているのではないかと、何か大切なことから目を背けていたのではないかと。

明日、私は書庫に行ってみようと思う。とにかく知識がほしい。私はいろんなことを知らなすぎるから。

調べて、聞いて、真実を知りたい。

そろそろ眠くなってきた。寝ようと思う。

また明日も、平和な日々が続きますように。

〜新暦５２１年　レスティアにて〜　　勇者遠藤麗奈の手記

01

始まりはそう、よく覚えている。
昔から抜けている抜けていると言われ続けていたが、自分の部屋に突如出現した落とし穴にバランスを崩して落っこちたときは自分のばかさ加減にあきれたものだった。
その穴は、不思議の国のアリスのように私を異世界へと連れて行った。
それが、勇者としての生活の始まり。

◇◆◇◆◇

激しく金属がぶつかり合う音が響く。
建物の中には濃厚な匂いが充満し、こみ上げてくる吐き気を押さえ込むので必死だった。

「風よ、鋭き刃となりて駆け抜けろ」

震える声を必死に紡ぎながら、私は必死にイメージを固めた。
言霊は力を宿す。その言霊にイメージを乗せることで初めて魔術は完成する。剣も何も使えない私の能力といえば、魔術しかなかった。
風が駆け抜ける音が聞こえる。目を閉じていた私の耳に、何かが切り裂かれる鈍い音と断末魔の悲鳴が聞こえてきた。

「リネット、ダグラス、ユリシード。行こう」
「「「了解」」」

背後を守っていた私の護衛の武官達の返事を聞き、私はゆっくりと目を開いて歩き出した。
ここは、レスティア王国の第一の砦とも呼ばれるトゥール城。私たちは、この城を陥落するべく戦っていた。
難攻不落の三大砦。そう称されたこの砦だったが、今はほとんど兵士がいない。今現在この国の軍隊はほとんど機能していないのだ。

「レナ、大丈夫か？顔色が悪いぞ」

ダグラスが心配そうに私を覗き込んだ。

「大丈夫だよ。それより急ごう、まだ敵はいなくなったわけじゃないんだから」

立ち止まれない。弱音は吐けない。ここは戦場だから。
勇者という旗頭である私が弱音を吐けば、ほかの兵が不安になる。だから私の役目は、いついかなるときも平気な振りをすること。

「第一小隊と怪我人ははここで待機、残りは付いて来い！」

ユリシードが号令をかけてくれて、リネットがさりげなく支えてくれた。この三人には、私の状態がばればれらしい。
さりげない気遣いが嬉しい反面、自分の情けなさが身に染みてぐっと唇をかみ締めた。

この世界では、異世界から紛れ込んだ者を渡来者と呼び、吉兆とした。

渡来者は国賓として扱われ、国の保護の見返りとしてさまざまな知識や利益をその国に与える。私も、そうなるはずだった。

けれど、私が落ちたレスティア王国は、混乱の真っ只中にあった。魔物の子供だと言われるジェラルド王が玉座に着いたことで、この国は彼に仕える者と彼を玉座から引き摺り下ろそうとする者の二つに分かれた。

冷戦に近かったその二派が本格的に内戦を始めたのは、王が玉座に着いて半年後のこと。歴史上まれに見る大飢饉が、この国を襲った。

大飢饉は、大いなる自然の民である精霊に見限られた証。それはすべて魔物を王にしたせいだと言われた。

また、王宮の貴族の調査により、彼の王がまだ王子であった頃、重臣の貴族を暗殺していたことも露見した。

これをきっかけに、王に逆らう反乱軍が発足し、内戦が始まった。反乱軍の旗頭は王族の傍系であるライラ・レサイティム。私を見つけ、保護してくれた人物でもある。

私は反乱軍に吉兆をもたらすものとして、彼女の元にとどまることとなった。もちろん強要されたことではなく、自分の意思に近い。

干からびた田畑を必死に耕し、わずかな食料を手に入れようと躍起になる人々。飢えて死んでいく子ども。自分が今までどれだけ恵まれた暮らしをしていたのかがよく分かる光景だった。

自分に何かできることはないのか。吉兆として彼らの希望になれるなら、いくらでも協力しようと思った。いつの間にか使えるようになっていた魔術と精霊の声を聞くことのできる能力、それを生かして、彼らの力になりたいと思った。

そして、反乱軍に入ってからしばらくして。いつの間にか私は勇者と、そして彼のジェラルド王は魔王と呼ばれるようになっていた。

「ライラ」

城の最奥、司令塔に彼女はいた。つまり、すでに制圧が済んだということだ。

「レナ。良かった、何処も怪我をしていないみたいね」

ふっと微笑んだ彼女は、戦場にいるとは思えないほど凛としていて美しい。

彼女は私の顔色を見ると、気遣うように行った。

「どこか空き部屋を用意するから、休んでいらっしゃいな。疲れているでしょう？」

「う、ん。ありがと」

苦笑いを浮かべ、私は早々にその場を去った。

近くの、たぶん武器倉庫か何かであったのだろう空き部屋に入り、へなへなと床に座り込む。

「……」

涙も出ないし、言葉も何も出てこない。

ひざを抱えて、私はただうずくまっていた。

最初戦場に行ったときは、三日間吐き続けた。飛び散った血飛沫が、物言わぬ死体が、床に散らばった肉片が、ひたすら視界を埋め尽くしていた。

胃の中身がなくなっても、吐き気は止まらなかった。三日狂ったように泣き叫んだ。現実だと認めたくなかった。

夜中のホラー映画なんてかわいいものだ。現実は怖かった。自分

の戦争というものの意識がどれだけ低かったのか、改めて思い知った。
今はもうその現実を良く理解し、覚悟を決めてしまったのだけれど。
それが果たしていいことだったのかは、もう分からない。

「レナ」

閉めておいた扉の向こうから、心配そうなリネットの声が聞こえてきた。

「……どうしたの？」
「中に入って、いい？」

許可すれば、眉を八の字にしたリネットが入ってきた。

「またこんな部屋で……逆に疲れるわよ」
「んー、いいの。そんなに疲れてないし」
「嘘おっしゃい。ホラホラ、立った立った」

腕を掴んで無理やり立たせる。立ってみると確かに体が重くて、あぁ疲れていたんだなと気付いた。

「自己管理は生きていくのに大切なことなのよ。部屋にたらいとお湯を用意しておいたから、体流して寝ちゃいなさい」
「……リネットってお母さんみたいだよね」
「……私はまだ２３なんだけど」
「面倒見がいいなって意味で！！　別におばさんくさいとかそういう意味じゃないからっ！！」

必死に訂正すれば、「貴方に比べればどうせおばさんだけどね」とちょっとすねた返事が返ってきた。

「とにかく寝なさい。夢も見ないぐらいぐっすり寝て、心を整理するの。分かった？」

「分かった。おやすみ」

「……おやすみなさい」

苦笑いを浮かべていたリネットにこちらも精一杯の笑顔を返し、私は部屋に入った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3437t/

混迷の玉座　～二冊の手記と綴られたる裏歴史～

2011年10月9日18時58分発行